

## 湿固定標本作製における BD コーティングスライドの基礎的検討

◎橘 郁真<sup>1)</sup>、西浦 宏和<sup>1)</sup>、龍見 重信<sup>2)</sup>、渡邊 拓也<sup>2)</sup>、西川 武<sup>2)</sup>  
大和高田市立病院<sup>1)</sup>、奈良県立医科大学附属病院<sup>2)</sup>

【はじめに】細胞診における湿固定標本作製では、いかに細胞剥離の少ない塗抹標本作製するかが重要である。今回我々は、体腔液残余検体を用い、BD シュアパス™ プレコートスライド(以下 BD スライド)の細胞接着能について基礎的検討を行ったので報告する。

【方法】奈良県立医科大学附属病院において 2021 年 10 月に提出された細胞診体腔液残余検体から 11 種のプール検体を作製した。プール検体より、それぞれ細胞浮遊液に生理食塩水及び 95%エタノールを使用した検体から検体量 10 $\mu$ l を採取し引きガラス法による塗抹標本作製した。次に、塗抹標本の浸漬固定溶液に生理食塩水及び 95%エタノールを用いることで、以下の 5 種類の標本作製した。対照法:乾燥固定標本(細胞浮遊液生食・乾燥固定)。A 法:細胞浮遊液生食・浸漬固定生食法。B 法:細胞浮遊液生食・浸漬固定 95%エタノール法。C 法:細胞浮遊液 95%エタノール・浸漬固定生食法。D 法:細胞浮遊液 95%エタノール・浸漬固定 95%エタノール法。作製された標本はギムザ染色又はパパンニコウ染色を行った。検討は、塗抹中心部付近における

4 視野中の孤立散在性細胞数及び集塊出現数を対物 20 倍でカウントした。統計学的処理は EZR を用い Wilcoxon 符号付順位和検定により  $p < 0.05$  を有意差ありとした。

【結果】孤立散在性細胞数は対照法で平均 108.4 個であった。A 法は平均 94.8 個、B 法は平均 93.8 個、C 法は平均 118.2 個、D 法は平均 134.4 個であった。対照法に比し A 法～D 法すべての方法の間に有意差を認めなかった。また、集塊出現数は対照法で平均 0.15 個であった。A 法は平均 0.25 個、B 法は平均 0.16 個、C 法は平均 0.18 個、D 法は平均 0.34 個であった。集塊の出現数においても対照法に比し A 法～D 法すべての方法の間に有意差を認めなかった。

【考察】BD スライドを湿固定標本作製に使用した場合、乾燥固定標本であるギムザ染色に匹敵する細胞量が保持されることが明らかとなった。湿固定標本における細胞接着性の向上は、上皮性腫瘍細胞の検出率の増加や免疫染色などにも応用できることが期待される。今後、臨床応用を行いさらなる知見を積み重ねていきたい。

連絡先: 大和高田市立病院 臨床技術科 0745-53-2901